

(1) 精神環境としての自然

THE RELATION BETWEEN NATURE AND HUMAN'S MENTAL ACTIVITY

川 瀬 博*

Hiroshi KAWASE

ABSTRACT; This paper reports a discussion about nature from the viewpoint of human's mind. The author tries to consider a pattern which controls our recognition and act without a clear consciousness, and insists on the importance of the relation between nature and human.

If nature is defined as the human's mental environment, the important factors are not the physical factors, like air, soil, water, green and wild animals, but the sensory factors, like figure, colour, and odor. The later may be called the nature of Gestalt, which is an environment based on the senses. Nature being which is variety may have a high Gestalt-effect.

KEYWORDS ; pattern, mental environment, nature of Gestalt, Gestalt-effect

1. はじめに

身近な自然の保全・活用に対しては、近ごろ市民権が得られつつあるが、人間にとって好ましい環境保全一街づくりの形成という観点の中で、その意味と価値がいまだ十分に検討されていないと考えられる。

そうした状況のもと、身近な自然とふれあい、遊ぶ機会の加速度的な減少が、子供たちの心身の成長に暗い影を落としている。折しも、環境庁は統計的に、緑が減っているところでは、なぜか校内暴力が多発しているとの見解を示した¹⁾。

本稿は、自然を人間の精神環境として把握し直し、あまり意識されることもなく私たちの認識や行動を支配している原型を探ることにより、自然と人間の係わりの大切さについての考察の端緒としたい。

2. 自然と精神をめぐる諸論考

人間の精神環境として、自然を考察したいいくつかの論考が認められるので、まず、それらを類型的に概観してみたい。

2.1 自然人類学・人間生態学のアプローチ

柴田敏隆氏は、都会住いの子供たちに肉体的、精神的、情緒的な劣化現象が目立っており、幼なくして既に衰える意味から、老衰ならぬ幼衰現象が出現している現在の状況を危惧し、その要因として自然からの疎外を考えている²⁾。

小原秀雄氏は、人間の精神形成・人格形成に自然環境が解発刺激として作用することに注目し、生態系の多様性の維持という自然保護の論拠が、人間の精神生活の向上にも通じることを指摘している³⁾。

品田穰氏は、人間の視知覚特性を、生理学と行動学の領域から解析し、人間の眼が生理的に緑の自然に適応していること、更に、人間がうっそうとした原生林よりも、むしろ草原や疎林を好むという統計的に明か

* 横浜市公安局対策局 Pollution Control Bureau, Yokohama City Office

になった心理特性については、地質時代にヒト以前からヒトへと進化した時期に人類にインプリンティングされた特性として現代人にも持続しているという仮説を提示している⁴⁾。また品田氏は、生物に特有な知覚時間と生物に特有な「かわり」の空間を踏まえて、Human Ecological Space論を展開している⁵⁾。

2.2 精神医学・心理学的アプローチ

岩井寛氏は、人間の心理と深層心理の領域に、色と形がどのような世界を形成しているのかについて論及しており、人間は色に対して特定な意味づけを、また、形を通じて固有の意味を見い出していることを述べている。その中で、自然環境を代表する緑は心理的安静をもたらす色であるとしている⁶⁾。

2.3 哲学的アプローチ

市川浩氏は、人間と自然との係わりを、身体と自然の係わりと発想し、そのなかで現われてくるのが世界であると関係づけている⁷⁾。ここでいう身体の極限概念は精神と重なることが市川氏の身体論の特色であり『精神としての身体』という表現に約言されている。「人間の現実存在を身体として把握するかぎり、自然を単に対象的なもの、われわれにとっての道具とみなし、それを征服し、支配するといった思想は生まれてこないであろう。具体的身体においては、対象にはたらきかけることは同時にはたらきかけられることであり、身体と自然との相関にもとづく対象とのより深まる交叉において、われわれと自然とのかかわりもまた奥ゆきをまし、われわれは自然認識の更新をもとめられるであろう⁸⁾」としている。引用文の身体という言葉に精神という言葉置き換えることにより、本稿のテーマとクロスすることがわかる。

中村雄二郎氏は、「視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感を貫き統合するものとしての共通感覚⁹⁾」により「近代科学がその発達過程で軽視したり切り捨てたりしてきたさまざまな側面や要因を、新しい観点から吟味して取りこみ、私たちの具体的な生活とも、私たち人間の属するそれぞれの文化とも結びつけたものにすることである⁹⁾」と、科学のあり方に対して新たな方向性を示している。「科学の知が冷やかなまなざしの知¹⁰⁾」であるのに対して、共通感覚によるパトスの知、それは身体や体性感覚に由来するものであるが、その知に基づく人間、自然、社会の認識に係る知の転換の必要性を説いている。

科学哲学の領域では、村上陽一郎氏が西洋近代科学の認識を相対化する視点を展開している^{11) 12)}。

内山節氏は、自然と人間の係わりについて異質な角度から論じており、本稿の論の構え方に対して批判ともなりうる視点が含まれている。それは「経済外的な対象としての自然の価値を重視すること、即ち人間の生活のなかでの自然の価値や、人間の精神的な生活の自然の役割を重視することは、商品経済の対象として自然をみた近代的な自然認識との一面での類似性をもっている。なぜならどちらも、自然を人間にとっての効用の対象にしてしまっているからである。相違は経済的な効用と人間の存在の全体性における効用の違いであるにすぎない¹³⁾。」という視点である。

3. 問題の提起

夕焼の西空、海岸の崖にそそり立つタブノキ、間伐後の雑木林の雨上がりなど、これらは時として、筆者を忘我の状態にするだけの力がある。この現象は自然のもつ形、色彩などが人間に与える影響＝感動であると考えられるが、その効果をゲシュタルト心理学にちなみ、ゲシュタルト効果と仮定すれば、ゲシュタルトとしての自然を、人間の精神環境として把握する方法が可能となると考えている。

自然環境を構成する諸要素は、ものとしての世界であり、通常、大気、土、水、緑、野生動物などとして区分されるが、ゲシュタルトとしての自然は、人間の五感に基づいて把握される環境世界なので、形、色、匂いなどがその区分の指標となる。

人間の精神環境として自然を眺めた場合、大気、土、水などという区分では意味を持たないが、形、色、匂いなどで区分された自然は、新たな意味をもってくるといえる。

4. ゲシュタルトとしての自然 ——その事例と解釈——

ゲシュタルトを簡単に定義すれば、形もしくは構造と翻訳できるが、意を満たした充分な訳語とはいえない。木田元氏は、メルロ＝ポンティを引用しつつ、ゲシュタルトの意味を、人間が生きることと関係づけて次のようにまとめている。

ゲシュタルトGestalt, つまり要素の総和には還元されない内的分節をもった全体、あらゆる定立作用に先立つ構造的意味 — 「地」の上の「図」 — をもった有機的全体、これが知覚野の構文法なのである。この構文法を発見したことによって、ゲシュタルト心理学は事実上「生きられる世界への還帰」を行った……(略)かれ(注、メルロ＝ポンティ)の説く「生きられる世界」とは、まさしくこのようなゲシュタルトの位置しうる世界、むしろゲシュタルトとしての世界にはほかならぬことが納得できよう。

われわれが知覚によって生きているこの世界、これこそが科学による客体的世界の構成の出発点でもあればその不断の足場なのでもある。「われわれはもはや、知覚とは端緒における科学だとは言わないで、逆に、古典科学とはおのれの起源を忘れてみずからを完結したものと思いつこんでいる知覚のことだと言おう。」だからこそ、この起源に立ちもどって、客体的世界の権利と限界とを見きわめる必要があるのである¹⁴⁾。

海岸の崖にそそり立つタブノキを見て、筆者はたいへん感動をした経験がある。それは、海の青さ、崖の陰しさ、葉の照りと安定感のある確かな技ぶりというゲシュタルトが、心に作用して強い感動を呼び起こしたものだと思える。より詳しく述べれば、ものとしての自然が、ゲシュタルトとしての自然へと転化し、筆者の眼前で、形、色、匂いなどを指標とする新たな自然の分節化が遂げられたといえる。

感動と同時に、ひとつのことがらの謎が氷解した。

そのことがらの内容は本稿のテーマから外れるので、別稿¹⁵⁾を参照していただくとして詳しくはふれないが、民俗学者折口信夫氏の『古代研究』の口絵に再三掲載されているタブノキと古代の土着信仰であるニライ — カナイ信仰との関係についての解釈である。

ゲシュタルトとしての自然が、想像力を喚起し、「目に見える自然のうちに目に見えるものでない自然を実感⁷⁾」させてくれた。ここでいう目に見えるものでない自然とは、時一空を超え、想像力を介して交感された出来事としての自然と言い換えることが可能である。目に見える自然、つまりものとしての自然が、形、色、匂いなどというゲシュタルトとしての自然に転化することにより、ものの中に、ことを告知してくれたわけであり、精神環境としての自然とは、こととしての自然を内に含んでいる。このことが重要であると思われる。

木村敏氏は、ものとこととの存在論的差異を次のように要約している。

ものとこととの存在論的差異は、われわれが観念の遊戯の中で理論的に導き出せるような概念ではない。それは、われわれがこの世界の中で現実¹⁶⁾に生きているという営みにおいて多様なものと交渉をもっている、その交渉自身の真の姿なのである。ことがものとの差異において見えてくるためには、われわれ自身の生きた意識がそこに立ち会っていないなくてはならない。¹⁶⁾

木田氏にしても木村氏にしても、立論に際して人間の側に「生きる」と言ういわば励起状態を想定しているのが共通していて興味深い。

以上の内容を踏まえ、ゲシュタルトとしての自然の発生過程を市川氏の身体論⁷⁾に依拠して定式化すると表1ようになる。

前章にて例として掲げた「夕焼の西空」や「間伐後の雑木林の雨あがり」も、ゲシュタルトとしての自然という思考の枠組みの中で同様な説明が与えられる。

だが、ゲシュタルトと言う表現を用いると、その一言で、すべてがいつくされ、世界が凍結されてしまう危険性をはらむ。そうであっても、生きられる世界を解き明かす構文法とはなり得ない。

表1は、過程的なものであるが、ゲシュタルトとしての自然への転換を、ものからことへの転換との関連で、本稿で展開してきた内容を整理すると表2のようになる。

表1 ゲシュタルトとしての自然の発生過程

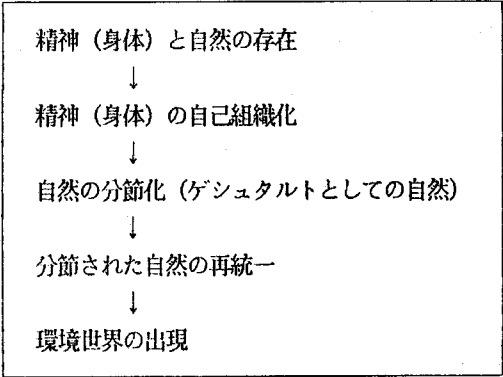


表2 ものとしての自然とこととしての自然の区别

	人間との係わり	対 象	認 識 法
ものとしての自然	物理的環境	大気、土、水、緑、野生動物など ・・・環境資源として存在	分析的理性
こととしての自然	精神環境	形、色、匂いなど ・・・ゲシュタルトとして存在	○共通感覚 ○想像力

5. おわりに

本稿のねらいは、人間の精神環境として自然を再評価する試みである。ゲシュタルトとしての自然という把握の仕方、更にゲシュタルト効果という考え方は、筆者の個人的な経験を立論するために採用されたものである。論から論理の組立に際しては、現象学、構造主義の哲学に多くを負っている。参考にした多くの著者の文献に関係したことであるが、その全体構成を踏まえた上での引用に必ずしもなっていないかもしれない。それは本稿の論理の展開に引き寄せたためであり、著者の本位ではないと思う。お断りしておきたい。

最後に若干結論めいたことを述べて本稿のしめくりとしたい。

環境は何も自然環境だけではなく、人工的な環境も存在している。自然環境が多様であるように人工的な環境も当然なこととして多様であるといえる。では筆者はなぜ自然をことさら人間の精神環境として取り上げたのかといえば、それは日々失われていく都市の自然のもつ潜在的な価値を惜しむためである。今日の都市環境にあっては、文化施設をつくるより、むしろ、2～3ヘクタールの雑木林を保存しておいた方が、現在と将来の人間にとって、より良い文化の拠点になると思えるが、これは独善であろうか。

本題にもどりたい。自然は精神環境としてゲシュタルト効果が高いと思われる。それは、環境資源としての自然が多様性に富むからである。また日本は常春・常夏の国とは異なって四季が明瞭であるという自然特性をもっている。人間の側に「生きている」現実されれば、多様で多彩な自然との出会いがかなうというものである。

ゲシュタルトとしての自然と出会うためにも、都市の近郊や身近なところに豊かな自然が存在することが必要と思われる。

6. 謝辞

本稿を作成するにあたり、公害対策局の職場の方々に有意義な示唆とお力添えを頂いたことに感謝するとともに、本文の内容は個人の責任で取りまとめたことをお断りします。

文 献

1. 環境庁：快適環境づくりのすすめ、1983.8
2. 柴田敏隆：子どもの人間形成と自然環境の教育的機能、教育展望、臨時増刊No.11, 1980
3. 小原秀雄：環境と人類、共立出版、1978
4. 品田穰：人と緑の空間、東海大学出版会、1980
5. 品田、杉山、立花：都市の人間環境、共立出版、1987
6. 岩井寛：色と形の深層心理、NHKブックス、1986
7. 市川浩、山崎賞選考委員会：身体の現象学、河出書房新社、1977
8. 市川浩：精神としての身体、勁草書房、1975
9. 中村雄二郎：パトスの知、筑摩書房、1982
10. 中村雄二郎：術語集、岩波新書、1984
11. 村上陽一郎：西欧近代科学、新曜社、1971
12. 村上陽一郎：近代科学と聖俗革命、新曜社、1976
13. 内山節：自然と人間の哲学、岩波書店、1988
14. 木田元：現象学、岩波新書、1970
15. 川瀬博：金沢の自然史、関東学院大学経済研究所年報、1983.3
16. 木村敏：時間と自己、中公新書、1982